

各症例の「倫理的問い」リスト（ケース、ページ、問い、国名、時期（西暦））
作成 浅井 篤

Book 2 『利益と害』

ケース テーマ 倫理的問い	国	時期
Case Study 1 同意なしの治療—医療行為の拒否 「医療スタッフはEBさんに強制的な栄養補給を行うべきだろうか」	米国	1986
Case Study 2 同意のない治療—患者の拒否にもかかわらず施行された治療 「医師たちは術中にBに輸血をすべきであったか」	日本	1998
Case Study 3 同意なしの治療—患者の意見を無視した治療 「M医師はこういった状況においてHSの手を切断すべきであったか」	カナダ	1935
Case Study 4 同意のない治療-第三者を通じて行われる治療 「この精神科医は、患者が何の知識も得ないまま、母親を援助して患者に薬物療法を行うことで、母親と協力することは許されるべきであっただろうか」	イスラエル	不明
Case Study 5 未成年者の治療 「両親の拒否にもかかわらずPにPKUテストを行うべきか」	アイルランド	2001
Case Study 6 未成年者の治療—患者の福利 「子供は両親の拒絶にもかかわらずHIV検査を受けるべきか」	英国 UK	1999
Case Study 7 未成年の治療—ティーンエイジャーの治療 「どのような状況においても、医師はいつでも合法的に避妊のアドバイスや処置を16歳未満の少女に対して両親の同意なく行えるだろうか」	英国 UK	1985
Case Study 8 未成年者の治療 「行政は給水を介してフッ素を供給し続けるべきか」	アイルランド	1965
Case Study 9 未成年者の治療—10代の未成年者における美容外科 「Sは美容外科を受けるべきか」	米国	2004
Case Study 10 選択的処置 「医師は、他方の双胎児の安全な誕生を保証するために「動けない」双胎児の選択的人工流産を実行すべきか」	香港	1998
Case Study 11 選択的治療 「手術はマリーの死を引き起こすであろうということを知りながら、病院は双生児を分離すべきであろうか」	英国 UK	2001
Case Study 12 選択的治療 「Kの事例で中絶や避妊手術は適切な解決策であろうか」	ニュージーランド	2004
Case Study 13 選択的治療	ニュー	1992

「医療スタッフはこの提唱された電気ショックによる治療を行うべきか」	ジール ンド	
Case Study 14 選択的治療 近年開発された医学的治療 「医師は、X ナイフで G を治療すべきだったか」	シンガ ポール	2002
Case Study 15 選択的治療 「G 医師は依存性のある薬物で薬物依存の患者を治療すべきであろうか」	英国 UK	2002
Case Study 16 研究—患者の知らされていない研究への参加 「G 医師は、JM の担当医として本人に知らせないまま、また本人にとって治療的価値のない研究に携わってよいであろうか」	米国	1991
Case Study 17 新薬の利用と手続き—新薬の賢明な使用 「政府は、公的医療施設で治療を受けている HIV に感染した妊婦が母子感染のリスクを防止・軽減することを希望した場合、彼女らが薬剤 N を使用することを拒否する権利があるのか」	南アフ リカ	2002
Case Study 18 新薬の利用もしくは手続き— 実験的医療 対 科学的根拠に基づく医療 「RM へのこの物質の使用は許可されるべきか」	イスラ エル	不明
Case Study 19 新しい薬剤または手技の使用 「CS さんに、入院している病院が認可していない薬剤の使用は許可されるべきか」	米国	1977
Case Study 20 新しい薬剤や手技の使用— 証拠に基づく治療ではない場合— 「JA と JS は提案された実験的治療法で治療を受けるべきだろうか」	英国 UK	2003
Case Study 21 移植—未成年からの骨髄移植 「CD から妹への骨髄移植は許容されるだろうか」	イスラ エル	不明
Case Study 22 移植—精神的な障害を持つ患者からの腎臓の提供 「H は移植に対して同意する能力がないが、H から父親への腎臓提供は許容されるべきだろうか」	イスラ エル	不明
Case Study 23 臓器移植 「判断能力を持たない若い J が、兄の命を救うために腎臓を提供することは許されるべきか？移植手術は行われるべきか」	米国	不明
Case Study 24 生殖医療 「この子どもたちは X2 の生物学上の子どもとして認められるべきか」	日本	2006

Case Study 25 生殖医療 「遺伝疾患を持つ同胞を治すことを目的に、組織が適合する健康な子どもを産むためだけに、この技術（体外受精：翻訳者追加）の使用は認められるべきか」	英国	2003
Case Study 26 情報—第三者に対する責務 「医師には、患者が治療中の疾患が遺伝性であることを患者の子どもに警告する注意義務があるだろうか」	米国	1995
Case Study 27 情報—患者に医学的な秘密情報を開示しないことについて 「B医師はKP氏がHIV陽性であるかもしれないことを告げるべきであっただろうか」	カナダ	1994
Case Study 28 情報—医療における秘密保持とその諸限界 「病院はXがHIV陽性であることをAの家族に情報提供すべきだったのだろうか」	インド	1998
Case Study 29 情報—医療上の秘密保持の侵害 「医師はXの尿サンプル中に覚せい剤が検出されていることについて、彼女の両親と警察官に情報を開示すべきだったのだろうか」	日本	2002
Case Study 30 情報—AIDS患者の秘密保持 「医師はPDとFH両者の医師という彼の立場において、共同相談実施を理由に、PDにFHがHIV陽性であることを開示すべきだったのだろうか」	豪州	2004
Case Study 31 情報 「病院は、彼女の拒絶に拘わらず、協議会にX夫人の診療記録を開示すべきか」	豪州	2006
Case Study 32 情報-犯罪者に関する秘密の保持義務 「E医師は、自分の報告書を国務大臣に送付すべきであったか」	英国	1990
Case Study 33 雑録—医療の広告と宣伝 「K医師が想定していることは正しいか」	香港	2006